



Haruki Miyoshi

文：三好春樹

Masahiko ISHIHARA

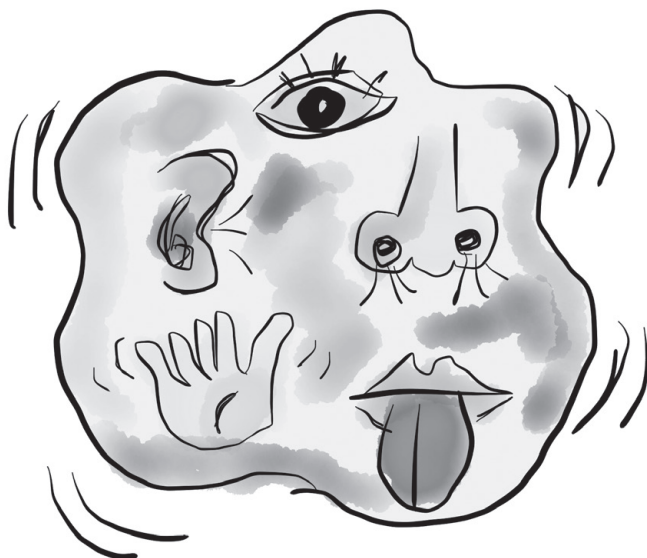
イラスト：石原雅彦

45

無意識

認知症老人を評価するいくつかの方法が知られている。でも私は「そんなことで評価できるかよ」と思わざるをえない。それは、いずれの評価法も、わかっているか、覚えているかを判定しようとするものだからだ。

そういった、言語化された意識の世界ではなくて、認知症老人の無意識の領域こそが大事なのではないか。無意識が落ち着いているか、荒れているか、それが認知症老人が求めている評価ではないか。そんな方法はあるか？ 老人の表情を見る、コトバの内容より口調に耳を傾ける、ちゃんと食べているか、寝ているか……。つまり介護者の五感、さらには六感こそ評価法だろう。



Illustration： 義母が暮らした老人ホームにいた高齢のHさんは102歳まで生きて亡くなられたが、母親の介護に通う妻あこがれの女性で、亡くなられたあと彼女のためオルゴール曲を作曲した。お会いした時はすでに認知症の深い人だったが、常に物静かで介護者を困らせることもなく、「ありがとう」「せわでしょう？」「すてきね…」と他人を思いやる言動が終生消えることがない情緒の綺麗な人だった。情緒は無意識の中にある。